

# エレン・ゲイツ・スター：ハル・ハウスにおける 製本制作の盛衰を中心に

杉 山 恵 子

## Ellen Gates Starr: Bookbinding at Hull House

Keiko Sugiyama

### Abstract

Under the leadership of Ellen Gates Starr, Chicago's first settlement, Hull House, intended to be a place for the "exaltation of art for the benefit of the masses". Being influenced by the British Arts and Crafts Movement, Starr, a bookbinder herself, was convinced that art could be a means of radical social change. As years passed, however, Starr's influence at Hull House diminished. Focusing on Starr's bookbinding and its role at Hull House, I will argue that this change represents the crucial policy shift at Hull House. This explains why Starr and her radical ideas were forgotten.

*Keywords* : Ellen Gates Starr, Jane Addams, Hull House, Bookbinding

キーワード：エレン・ゲイツ・スター，ジェーン・アダムズ，ハル・ハウス，製本

### はじめに

1889年、シカゴの貧しい移民居住区に移り住んで、福祉施設（セツルメント）ハル・ハウスを開設したジェーン・アダムズ（1860–1935）は革新主義時代と呼ばれた20世紀初頭の改革を牽引したとしてアメリカ合衆国では広く知られた人物である。しかし、ハル・ハウス創始者のもうひとり、エレン・ゲイツ・スター（1859–1940）を省みる人は少ない。ロックフォードセミナー（女子神学校）で同窓（1877–78年）だった仲である。ハル・ハウス誕

生のきっかけとなった、アダムズの二度目のヨーロッパ旅行に同行し（1888年）、ロンドンのトインビー・ホールに触発され福祉施設開設を思い立ったアダムズに寄り添い、共にプランを温め、初期の活動を常にとともにしていたのがスターだった<sup>1)</sup>。

なぜスターは表舞台から消えたのか。その晩年はどのようなものであったか。この問いに近年答えたのはスエレン・ホイの著作『エレン・ゲイツ・スター：その晩年』（2010）である。カトリックに改宗していた叔母エリザ・スターの影響を受け、1888年のヨーロッパ旅行では、イタリア、アッシジで祭壇にひれ伏して涙していたという。若き日から続くカトリック信仰への思いの数々を挙げ、晩年のカトリックへの改宗が決して突飛な決断ではなかったと説明している。1929年の結核の手術後、下半身不随となったスターを支え、カトリック教会付属の介護施設への入所を可能にしたのも信仰を同じくした人たちの助けであった。頼る家族のない晩年のスターが最後まで凜として生きた姿と同時に、若き日には想像もできなかった活動家の老いの姿を伝えている<sup>2)</sup>。

しかし、最初の問いはまだ解き明かされてはいない。なぜ、スターは表舞台から消えたのか？ 本論ではスターの仕事を振り返り、ハル・ハウスの活動家・改革者仲間と比較をすることで、スターから視線が遠のいて行った過程を明らかにしたい。当時の改革の性格を浮かび上がらせることになるからである。異文化・異人種の移民の到来、都市化、貧富の拡大を背景に募る社会不安の中で、スターが関わったアーツ・アンド・クラフツ運動や労働運動、黎明期の社会科学を問い直しながら、スターが忘れ去られたことの意味を問いたい。ことに本論で注目したのは製本指導の盛衰である。スターが始めた製本指導工房がレーバー・ミュージアム（以下労働博物館と記す）の拡大とともに、その位置を追われる過程に注目した。スターが製本作業を封じ込め、より直接行動で労働現場にのめりこむ姿が明らかになるだろう。融和・協調・寛容を旨とした改革路線を歩んだハル・ハウスとの決別が見えてくるだろう。

スターは長くその経歴を忘れ去られただけではなく、脱落者のイメージを背負わされてきた<sup>3)</sup>。本論ではそのスターの再評価を試みたい。スターはハル・ハウスが選びとっていった価値観の対極を象徴していた。芸術教育においても、労働運動においても、社会改革の方法においても、宗教の選択にお



Ellen Gates Starr Papers, Sophia Smith Collection, Smith College

いてでもある。脚光を浴び続けるアダムズとは対照的に<sup>4)</sup>、退けられ、忘れ去られた。19世紀後半、近代化が進み、都市に移民があふれ、社会の非キリスト教化が進むアメリカで、ハル・ハウスの改革に背を向け、求道する道を選んだことの意味は今日のアメリカ社会を考える上でも重要と思われる。近代化のひずみの是正に最前線で飛び込んだスターだからこそ、最後に下した決断の重みを検証したい。

## 1. ハル・ハウスにおける製本指導

スターがハル・ハウスの一室を借りて始めた製本作業の現場を伝える写真がある。静謐な佇まい、整然と置かれた道具から自らが使う道具への思いを感じ取ることが出来るだろう。壁に貼られた写真はウィリアム・モリスにジョン・ラスキン、帽子を被るのはT・J・コブデン―サンダソンである。ジェフリー・チョーサー作品集の扉、世界三大美術といわれるアーツ・アンド・クラフツ運動の金字塔も掲げられている。さらに、児童福祉が最大の関心

であったハル・ハウスの精神を象徴する母子像が飾られている<sup>6)</sup>。画家の判別は難しいが、スターがシカゴの小学校にヨーロッパ絵画の複製を寄贈したことを振り返ると、そうした折の複製画らしき絵画が他に数点飾られている。ハル・ハウスにおけるスターの想いがすべて壁に現れたようだ。スターはハル・ハウス開館当初、全体の装飾を任せられ、細心の選択を行ったことで知られている<sup>7)</sup>。ハル・ハウス内の装飾は移民との接触の上でも、理想を掲げてともに暮らしたレジデント（ハル・ハウスでともに生活し、活動拠点としていた人びと、男性も含む）にとっても日々の支えであり、彼らの心情を知る手がかりである。ハル・ハウスはスターの美意識と理想を象徴してスタートしたといっても過言ではない。

製本に取り組んだスターの思いは、1900年の小さなパンフレットに残る。スターがハル・ハウスに移り住む前、美術の授業を学校で受け持った経験があること、自分で創造したい欲求に常に突き動かされてきたことを告白している。そして現代社会において、美しいものと出会う喜びは奪われ、心と手仕事が一掃されになり、労働と精神が乖離していると訴える。人々が日々、無味乾燥な機械的な作業に追われていることを憂い、手仕事の喜びを取り戻し、伝えることこそ、自分が製本を通してやるべき使命と決意を語っている<sup>8)</sup>。

スターの師は当時圧倒的な人気を誇っていた、前述のT・J・コブデン・サンダソンであった。講演集にみられるT・J・コブデン・サンダソンの主張はラスキンを師と仰ぎ、中世の教会が取りまとめていた役割を新しい芸術家の使命として担おうというものであった。イギリスで興ったアーツ・アンド・クラフツ運動を製本で実践していた人物だった。アメリカの地を踏んだことのなかったラスキンやモリスとは異なり、T・J・コブデン・サンダソンは熱狂をもってアメリカで迎えられた。中世美術に憧れていた上流階級にも、職人の伝統が弱いとはいえ、機械化で手仕事を追われた職人達にも、広範に受け止められていたからである。職人組合の復活、芸術家の共同体作りを講演する先々で訴えた。高揚感に溢れた指導だったのであろう。製本に関して語られる、「審美的」、「包括的」、「崇高」、「調和」、「全体像」、「総合性」、「統一感」などの用語が描く理想世界は、仕事に没頭するスターを引きつけたことだろう<sup>9)</sup>。

スターが傾倒した初期のアーツ・アンド・クラフツ運動のハル・ハウスへ

の導入は改革志向の上流階級からの金銭的支援が可能にした。1892年『芸術と公教育』にはスターの教員時代のネットワークを使って学校に美術作品を展示していく様子が報告されている。子供たちに美しいものを見せたい、芸術を教育に役立てたいという強い思いが語られる。<sup>10)</sup> さらにスターを中心に設立されたシカゴ公教育美術ソサエティの活動は1896年『シカゴ公教育美術ソサエティ』に誇らしく報告されている<sup>11)</sup>。ハル・ハウスでは1891年、ハル・ハウス初の増設、バトラー・アート・ギャラリーに結実しており、スターが選んだ多くの作品が並び、人々が訪れ、支援者の獲得にも大きく貢献した<sup>12)</sup>。

1895年の『芸術と民主主義』<sup>13)</sup>では歴史が浅い民主主義国家アメリカには芸術作品に見るべきものが無いと嘆く。スターの憧れは愛読書であったラスキンの『ベニスの石畳』で語られる都市の姿であった。比べて目をおおうばかりの大都市シカゴの現実を強い口調で非難する。屯する女性達の服装や余暇にも批判の矛先は移り、倫理観をなくした都市への嫌悪を垣間見ることが出来る。しかし、誇るべきはアメリカの大自然という考えは退け、また当時人々が憧れた田園への逃避でもなく、また田園の復活でもなく<sup>14)</sup>、あくまでも都市の未来のために、都市に残りより美しい街づくりを提案する。セツルメントがその拠点になるのだという強い思いを語っている。

さらに、セツルメントの意義をより明確に語るのが、おなじく1895年の『芸術と労働』である。まるでウィリアム・モリスが乗り移ったように、国家が芸術を持つならば、それは民衆のものでなければならない、と宣言する。そして、喜びを持って働く、自由が保障された人々の「労働」が「芸術」として結実するのであり、「社会国家」という名でスターの呼ぶ、民主主義国家作りの前提となっていくと述べている。ここでも前論文と同様、セツルメントがシカゴという都市に集う人々の労働と芸術への発露を守り育てる拠点として位置づけられている。ラスキンやモリス、アーツ・アンド・クラフツ運動から学んだ改革の想いが極めてアメリカ的な、南北戦争後の新しい国家作りに位置づけられていくのが見えるだろう。芸術を核とするその思いは、「人間を取り囲む環境において、真の芸術の働きを支援し、芸術への愛を鼓舞しないのならば、何も生み出すことは出来ません。」と語る言葉に象徴されている<sup>15)</sup>。

このエッセイは『ハル・ハウスの地図と報告書』<sup>16)</sup>の中のスター寄稿文

である。大学や既成の体制から除外されていた人々が集い、手作りで始めたハル・ハウス周辺の実地調査報告は社会学調査の初期の重要な証左とみなされている。児童福祉が最優先だった女性たちの手で編まれたことから、アメリカ社会学成立初期の社会福祉先行型の特徴を生んだといわれるハル・ハウスの成果である<sup>17)</sup>。アダムズはこれらの調査結果を、劣悪な移民の住居、労働状況の改良、改革の切り札としていった。しかし多くの研究者はスターを例外的な人物として捉えている。インタビューの結果や統計データに基づいた実証研究の先駆けとなる他の寄稿文とはスターの論点・その方法は異なっている。都市環境改善、労働・福祉立法に大きく傾いていくフローレンス・ケリー、ジュリア・レイスロップ、アリス・ハミルトンらの著作傾向と比較すると、スターが願う芸術拠点としてのハル・ハウス像は異質である。協力関係にあったシカゴ大学の社会学者たちとの連携もスターの文中では言及がない<sup>18)</sup>。こうした違いはハル・ハウスが労働・福祉立法化という形で現実に向かうことで一層明らかになっていった。連邦政府の役割の拡大、州政府の市民生活にかかわる部署の確立にしたがって、ハル・ハウスは活躍の場を広げていったからである。

こうした立場を意識してか、スターは1897年12月から1899年3月まで前述したT・J・コブデン・サンダソンに弟子入りを果たした。自分の寄って立つところを見極めようとしたのだろう。「あなたは何をもって社会に貢献できるのか」という問い<sup>19)</sup>を突きつけられたとき、製本指導を選んだのである。弁護士や医師、黎明期の社会科学の分野に籍を置いていくハル・ハウスの友人たちに囲まれ、中等教育で教えてきた経験が強く問われたのであろう。全人教育的な発想を持ったスターは、まわりから専門職を問われる中で、社会と芸術の接点を確認しなければならなかった。女性の弟子を取らなかったT・J・コブデン・サンダソンが指導する初めてのアメリカ人となって修行した。帰国後の熱意は前述した1900年のパンフレットにも明らかだ。少数ながらも弟子を取り、指導を展開した。ハル・ハウスにおける製本制作の成果は、1904年に展示会となって結実した。スターの製本制作活動のピークであった<sup>20)</sup>。しかしその後、民主教育・市民教育の拠点とした芸術教育への情熱は急速に失われていく。何があったのか。スターの思いを探る鍵はあるだろうか。

スターには1915年から1916年にかけて4回にわたる製本・装丁に関する論



文がある<sup>21)</sup>。数少ないスターの著作のなかで、その人柄を垣間見ることが出来るものだ。芸術教育を社会改革の中心に据えたスターが10年後に製本・装丁の指導をどのように語っているだろうか。

4編を通して共通しているのは、目標を美しい本を作り上げること一点に絞って語っていることである。手順よく、手際よく解説されている指導はスターの無駄のない性格、ゆるぎなさ、厳しさ、要求の高さを表している。弟子と接するその様子は一対一が基本である。「『面白いこと！いままでにみたことがない！』は間違ったことへの褒め言葉なのです。一度は生徒にこう書いたこともあるのです。『やってはならないことをすべてやってしまったすばらしい見本です』と。」弟子自身が間違いに気付くことが原点という指導である。一方、自分の失敗、いくら努力してもできなかったことを正直に伝える姿は好感の持てるものだ。装飾のデザインは製本者独自のものであり、模倣は許さない。道具を自ら作って仕上げる誇りを弟子に語っている。文様が施されると、「私に微笑みかける」という表現でその喜びを隠さない。しかし同時に、あくまでも製本は本の保護であり、不必要に装飾に凝ることを戒めている。出来上がりを世に出す段階を、身だしなみを整えた人の姿に例えていることもスターらしい。個性的な着こなしで友人たちに知られたスターだからである。何より、自分らしさを大切にすること。自分に愛情を注いでこそ、身だしなみは整い外に出る心構えが完了するのだと言う。こうした視点はスターの人との出会いに臨む考え方をも垣間見せるものだろう<sup>22)</sup>。

厳しい技術の習得の過程に集中して語られた4編には民主主義教育の基盤としての芸術という視点が落ちている。かつて見られた、周りの社会環境、またその変化への目配りも無い。ハル・ハウスではじめての製本教室の熱意はここに無い。民主主義国家の芸術のあり方を論じた初期の意気込みから遠く距離を置く姿である。語られるのは一対一で指導する極度に集中した時間の流れである。また指導に見られるプロセスの重視も特徴だろう。あくまでも製本という作業重視、その工程に中心が移っている。

同時に集中した仕事の齋す静寂にも言及している。製本を「心安らぐ楽しみ」ともいっている<sup>23)</sup>。なぜ安らぎを強調するのか。この時期、スターは人生の中でもっとも厳しい戦いの中にいた。スターはハル・ハウスの仲間たちから一線を画し、激しい労働運動にかかわっていたのである。そしてその凄まじさから安らぎの切望を知ることになる。

スターはかつて『芸術と労働』の中で自由が保障された人の労働こそが国家を支える芸術であると語っていた。人々の自由な表現が保障されることが社会の根幹なのであった。自由がなければ美しいものも作り出せない。ところがハル・ハウスの周辺は生計が成り立たない人々の現実であった。かつて芸術教育を通して都市シカゴにおける市民教育の基礎を築こうとした。人が本来持っている自由の発現、それが持つ創造力への信頼が根底にあった。しかし、スターは限界を感じていたのであった。その苦悩を次のように書き残している。「高価な製本は働く人々となんの接点も見出せませんでした。製本にかけられる唯一の言い訳は、他の事に時間が割ける収入源であることだけでした。」<sup>24)</sup> 10年の歳月を経て、自由さえ保障されない労働者の解放のためにスターは製本を封じ込め、労働組合運動に加わる道を選んだ。

## Ⅱ. 労働運動と労働博物館

スターが労働運動にかかわり始めたころ、ハル・ハウスでの様子を垣間見るエピソードを紹介しよう。本来アダムズはスターの考える芸術と同じ方向を向いていたはずだった。『ハル・ハウスでの芸術活動』において、アダムズは高尚な余暇のためだった当時の芸術のあり方を批判し、一般の人々の手に届くようにと芸術のあり方、その教育の方法と影響力を模索する発言を残している<sup>25)</sup>。

しかし、アダムズの次の記述に出会うとき、芸術教育の方向性がスターとは異なっていることに気付く。レジデントがハル・ハウス内の劇場の壁画を描くプランを語る箇所である。第一候補はトルストイの肖像を描くことであった。これには誰も異論が無かった。次にリンカーン。こちらもシカゴの若い芸術家たちの協力を得て実現にむかう。アダムズの尊敬する二人のヒーローがレジデントに共有されている。問題は残りの壁面2箇所に描く人物をだれにするかであった。アダムズも驚いたことに、長年仲たがいすることなく暮らしてきたレジデントが、そのヒーロー崇拝において仲間割れを起こすのである。候補にあがるのは、ダビデ像に、セント・パトリック像、ジャンヌ・ダルクにパスツール。ウィリアム・モリスの名をあげるものもいたが、「社会主義者の一部しかその名を知るものもない。」とアダムズは記す。意見はまとまらず最後は風景画になって落ち着く。この議論の熱狂をアダムズはハル・ハウスが芸術の拠点となることを目指した初期の目的が好ましい



形で展開していると結論付けた。注目したいのは、スターらが少数の社会主義者としてレジデントの中で位置づけられていることだろう。芸術論をかわすレジデントの様子を映像のように描くアダムズの見事な語りの中で、ひっそり佇むスターの姿が浮かび上がるようだ。さらに建築様式に言及し、アーツ・アンド・クラフツ運動から影響を受けた発想、その活動への決別を記すのである。装飾の壁泉は過去の芸術の遺物ではない。それを見て、故国イタリアの芸術を想うイタリア移民の心情と、置かれた立場を理解することこそがセツルメントと言う建物の担う使命であると。それはアダムズが社会学者を表明する瞬間でもあった<sup>26)</sup>。

アダムズは移民たちを受け入れる中でその文化の優劣を逆転していった。1900年の労働博物館が好例だ。そこでの展示方法は、初期のハル・ハウスの支援者の多くが、スターを通してアーツ・アンド・クラフツ運動に触発されてハル・ハウスに貸与・寄贈した美術品の傾向、その展示方法とはまったく異なる。ハル・ハウス入口に構えたバトラー・ギャラリーは残されたが、新しい労働博物館は建物裏手のビル内により広い場所を確保して作られた。のちには婦人クラブ（1904）、少年クラブ（1906）とよばれたハル・ハウスが誇る教育活動の場が併設され、移民文化の継承の場となっていく施設であった。高級な工芸である製本とは違い、移民たちが日常何気なく使用する生活用品、その作り方への尊厳を見せ、移民が持ち込んだ労働の価値を伝える場を目指した。多様性を受け入れ、分かち合い、アメリカの新しい文化創造を果敢に始めるアダムズの姿がここにある。制作を目の前で見て、体験できる「ハンズ・オン」博物館であり、もちろんこれには、ハル・ハウスに集ったジョン・デューイらの教育理念が反映されている。あえて学校といわず、博物館の名を冠することで、老いたものも、躊躇することなく訪れ、交流し、移民文化の継承の場とすることを狙った。アメリカに来て取り残される老親世代の尊厳を取り戻し、古いものを嫌悪する子供世代への橋渡しとして位置付けられていくのだった<sup>27)</sup>。スターの製本が並ぶところではなくなっていくのである。

しかし、その労働博物館の実態はどのようなものであったか検証が必要だろう。鳴り物入りではじまった博物館の説明には、常に民族衣装を着た女性達が作業する姿が掲載された。ハルハウスの年次報告書にはシチリア系、アイルランド系、ロシア系、先住民などの但し書きつきで民族衣装を着た彼ら



Plate 9 *The Many Faces of Hull House: The Photographs of Wallace Kirkland*, Edited By Mary Ann Johnson Jane Addams Memorial Collection, The University Library of the University of Illinois at Chicago, 1989

が布を織り、かごを作り、レースを編み、陶芸を行う写真が掲載されている<sup>28)</sup>。出自を偽って衣装をまとったものもいたという。かれらの「パフォーマンズ」は、労働博物館が一階に移動したため、開け放たれたその窓から外を歩く人々にも「見世物」のように観察されたという。臨場感を漂わせるため、シカゴ万国博覧会場から移設され、当時フィールド博物館に保管されていた品々がハル・ハウスに持ち込まれていた。新しくアメリカに加わっていく移民にも注目をしていたハル・ハウスは、フィリピン併合に伴う、フィリピン作品の展示も欠かさなかった。それらはルイジアナ購入100周年を記念して開かれた1904年のセントルイス万国博覧会場から、閉会后届けられた<sup>29)</sup>。

なかでも最も重要視され、スペースをさいたのは織物の工程の展示であった。初期の原始的な手作業から、進歩する過程を解説しながら展示に工夫がなされた。そこでは機械導入以前の、移民女性達が担う手紡ぎが「パフォーマンズ」の中心だったのである。労働博物館の名で結局は「進歩」を目で見



Plate 12 *The Many Faces of Hull House:  
The Photographs of Wallace Kirk-  
land.*

える形で強調したのだった。そして労働博物館の展示を解説する年次報告書の最後には「製本作業は場所の確保が困難であること、時間と集中が必要であるため会場にはすぐわないので、撤去された。」と但し書きが添えられている<sup>30)</sup>。こうした移民労働を見世物のように「展示」する労働博物館の実態を知るとき、そしてあれほど心をこめて道具を並べていたあの作業場を追われた時、働く人々とストに並んだスターの思いを慮ることが出来るだろう。そして何より、労働博物館の展示には資本側への視線がまったく抜け落ちていた。常に資本側との協調路線をとってきたアダムズには、移民たちの持ち込んだ技術への尊厳とそれがあってこそ今日の産業発展

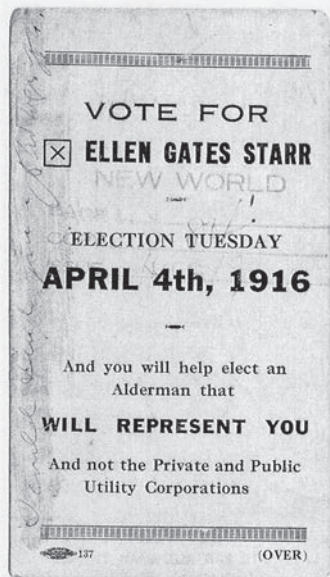
であることを目の前で多くの人々に証明することのほうが重要だった。移民をアメリカ社会に取り込むには、歴史の連続性を見せることが、移民にもハル・ハウスを訪れる見学者にも重要だったのだ。

一方、スターは芸術を生み出す前提と信じる自由すら獲得できていない労働者の声を聞いていた。ハル・ハウスの立地から、アダムズをはじめレジデントたちは当初から労働状況の改善にかかわってきた。ハル・ハウスは、シカゴの都市化に伴い、既製服、衣料関係で働く人々に囲まれていたからである<sup>31)</sup>。スターの関わり方が他のレジデントと異なるのは直接行動でかかったことであった。レジデントの中で語られなかったスターの急進性は1940年、スターの死後、エレノア・グレース・クラークが回想している。華奢な

スターが次々と労働組合を支援していく様子が称えられ、同時にアダムズが「本能的にさけた急進性」をことごとくスターが引き受けていたことを伝えている<sup>32)</sup>。

スターが参加した労働争議を見ていこう。最初は1896年、ピケをはるスト関係者に食料を配ったことから始まっている。支援金の獲得に奔走した<sup>33)</sup>。前述した製本の展示会が開かれたその年、1904年には婦人労働組合同盟(WTUL)のシカゴ支部の組合員となって、後方で支援金を集める穏健な方法から、自らがピケに並ぶ直接行動にかかわった。かかわった長期ストライキは1910年9月22日から1911年1月14日まで続いたシカゴ最大の紳士服メーカーを相手にしたものだった。4万人が参加したと言われるストライキである<sup>34)</sup>。1914年のレストランのウエイトレスのストでも移民仲間とともに、活動を展開した。このストライキ中「通りを歩いていた」だけで逮捕される。法的根拠の無いこの逮捕にスターは市民の権利として法廷で戦う道を選び、シカゴ市民に訴えた。スターの広報活動によってシカゴの劣悪な労働状況は一挙にシカゴ市民の注目を集めることになった<sup>35)</sup>。最後のストライキは1915年、これは1910年の紳士服メーカーにおけるストの再燃であった。サミュエル・ゴンパースがシドニー・ヒルマンの支援をしなかったことにその敗因があったとされるストライキであった。労働者を無視した労働組合の対立が齎した敗北に、スターの失望は大きかった。直後に、シカゴのアメリカ社会党に入党する。区長に出馬するも落選。「キリスト者としての約束をまもることが、私を社会主義者にした」とスターはのちに語った。農業労働者の地位向上を求めたグレンジ運動にかかわっていたスターの父は驚くことなく、スターの労働運動を見守っていたという<sup>36)</sup>。スターが当時選挙に使った写真<sup>37)</sup>が残っている。手にしているのは、そして控えめにその上部しか見えないが、自身で製本した本である。働くことと自由を求めることを製本作業に見出そうとした初期のスターの思いが表れている。そして1920年、ついにハル・ハウスを後にする。

その後1922年には鉱山ストライキ関係者のシカゴ来訪を支援して、自宅に泊めている。おとろえる肉体と闘いながら、労働条件の改善に臨む人々に手を差し伸べている。スターの最大限の支援であったろう。こうしたかたちでの労働運動への関わり方はハル・ハウスとは一線を画していた。社会主義への傾倒を避けていたのは前述したとおりである。ハル・ハウスへの支援を必



選挙時に配布した手札サイズの宣伝用カード 表と裏

Sherri Berger, "Bookbinding and the Progressive Vision," *Chicago History* Fall 2005, Chicago: Chicago Historical Society, p. 6.

要とするアダムズには、スターのような表立ったストライキへのかかわりを退けたことも先に引用した当時のレジデントの言葉に残る<sup>38)</sup>。

こうした中でスターが選び取っていったのは1920年のローマン・カトリック教会への改宗であった。アーツ・アンド・クラフツ運動に触発され、芸術と教育による社会改革、それを民主主義の基盤と定めて、歩み続けたスターが、ついには直接行動に訴えてまで実現したかった自由への希求。ことごとく拒まれ、支援を失った末の選択だったろうか。手がかりを求めて、スターが書いた告白書を読んでみよう。

### Ⅲ. 改宗の決断

カトリック教徒への改宗の道を選んだ過程は改宗後3年たって書かれた『A Bypath into the Great Roadway (偉大な道へと続いた脇道)』(1924年)に刻まれている<sup>39)</sup>。そこにはスターが1634年到着のマサチューセッツ、ディアーフィールドのピューリタンの家系に連なること。祖父母の代で直接ウィリアム・チャニングからユニテリアンに改宗したこと。ユニテリアンはキリスト教正統派の中心主義、三位一体説に反対の立場をとる。神の単一性を主張しイエスは神でないという立場から、異端とみなされた宗派である。東部から中西部に移り住んだユニテリアンの父母からはなんら宗教教育を強



要されずに育ったこと。そして、それを誇りにしていること。詩人であり、芸術家であった叔母エリザ・スター（1824-1901）の影響で、1884年、聖公会に通いはじめたことが語られている。しかし、聖公会での体験もしばらくは強く印象に残らず、5-6年を無為に過ごしたという。転機は労働者の声を聞くハンティングトン牧師（ジェームズ・オティス・ハンティングトン、1854-1935）に出会い感銘を受けたことにはじまる。貧富の差に目をむけ、改革をめざすソーシャル・ゴスペルとよばれた、社会的福音活動に期待を寄せていたのだ<sup>40)</sup>。

移民・都市流入者を労働組合に取られ、信徒獲得に遅れをとったと揶揄される当時の教会である。改革志向の動きが一方で広がる中、聖公会では色濃くカトリック的なものが広がっていた。移民を背景に広がる社会不安から伝統的な儀礼主義やカトリックの審美形式に人々がひきつけられていた背景がそこにあった。中世に心惹かれるものにとって、一流の芸術作品も宗教的なコミュニティにしか表れでないものであった。しかし19世紀アメリカを通じて、ローマン・カトリック教会はアイルランド系移民やイタリア系移民が集う教会であった<sup>41)</sup>。貧しい移民の教会を避け、かれらが集ったのが、聖公会であった。審美主義に走ることで、のちに脱宗教化を招いた、あるいは、審美形式に惹かれるのは、上昇する当時の都市プロテスタントの豊かさを象徴すると説明されてきた現象である<sup>42)</sup>。スター自身も審美形式に惹かれたという。しかし、当時の風潮だけでスターの聖公会への思い、さらにローマン・カトリックへの改宗は語れない。第一、スター自身がアメリカのゴシック様式の耐えがたい模倣と醜さを告発する言葉を残しているからだ<sup>43)</sup>。

ローマン・カトリック教会の想いが増したのは、1918年の夏であった。かわった労働運動への失望、さらに社会主義者を標榜した直後であった。しかし、改宗にあたってスターは一切それに触れない。積極的にローマン・カトリックを選択する決断をしたいと、あえて1919年デトロイトの聖公会大会に出席して最後の確認をしようとする。スターは60歳になっていた。「植林は老いた木では難しい」と改宗に消極的な人々の意見を退け、静かに改宗への想いを固めていく<sup>44)</sup>。決意を語る箇所は澁みない。統一も規律も権威もなく分裂と抗争を繰り返す当時のプロテスタント教会への不信と絶望を語る。そうした教会から離れることを自ら選び取ったとスターは言う。その決断を「暗闇での跳躍 (leap in the dark)」とスターは呼んだ。苦しみからの解放で

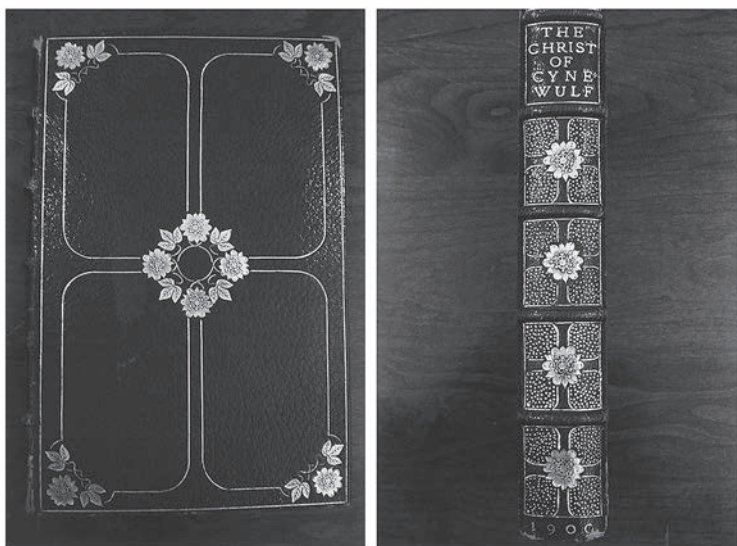


はなく、まして望んだ安心や光明を見つけた体験ではなかったと。不安と迷いの中の苦悩の決断であった。さらなる闇と乾きの世界へ飛び込むようなものであったというのだ。「新しくさまよい人」になるという厳しい決断であったと語るのである<sup>45)</sup>。

しかし、それはやがて、見えないもの、想像も出来ないもの、代償も対価も求めない理解と安らぎ、友愛の世界への天にも昇る幸せを手にした瞬間であったと語る。ベネディクト会を訪ねる箇所はことに胸を打つ。扉を開けスターを迎え入れるその招きに無常の喜びを語るのである<sup>46)</sup>。

本来、ハル・ハウスをそのような場所にしなかったのではなかったか。扉を開けて招き入れるイメージのそれはハル・ハウスの存在を都市の混乱の中に位置づけてきたメッセージそのものである。この短い告白はスターが関与したハル・ハウスには何一つ触れていない。19世紀末の都市化と移民という社会問題にあれほど関わり、民主主義国家作りの基礎に芸術教育の実践を置き、さらに人間の尊厳を求めて労働運動に身を置き、激しい生活を送ってきたにもかかわらず、何一つ語っていない。年老いて、不自由になった肉体にもなんら言及していない。語らぬスターの思いを知る鍵はないものだろうか。

スターは晩年、ウィラ・キャザーの『大司教に死は訪れる』(1927)<sup>47)</sup>を愛読した。アメリカ南西部、先住民プエブロの地、フランス、スペインの支配下からメキシコ領へ、さらにアメリカ領へと翻弄されたメサ・ヴェルデの地を舞台にした二人のフランス人神父の物語である。若き日に信仰に生きることを選択した二人の神父の壮絶な異郷、異教の地での体験が綴られている。病床にあったスターがメサ・ヴェルデの地を訪ねようとさえ思ったという<sup>48)</sup>。安易に関連付けることは許されないだろう。しかし、二人の神父の軌跡をアダムズとスター自身に重ねられないことも無いだろう。どちらがどちらに対応しているとは言いがたい。しかし、神学校で育まれた二人の深い信頼と愛情、性格の違いから別れてなお、それぞれが信念を全うしていく姿はどこかアダムズとスターを髣髴させる。知性と冷静さを体現している老神父ともう一方は少年のように若き日の信仰を問い続ける、無鉄砲な神父。同性愛を思わせる老神父の庇護も彼の目に入らない。まっしぐらに目の前にいる人々への布教にひた走る彼は、晩年からだが不自由となってもなお困難な布教を続けていく。そこで語られているのは、ヨーロッパ文明からの眼差しで



スターの製本例（著者撮影）

Mortimer Rare Book Room, Smith College

はなく、新しい大地、そこに暮らす人々に圧倒的に魅せられた神父たちの姿である。もはや異文化との共存・並置しか道が残されていない。しかし、それを知ってなお布教を続ける姿である。土地の燃えるような赤さが殉教者の血の色とまで描かれた<sup>49)</sup>。

筆者にはスターが書き残した改心体験、カトリック芸術、典礼を解説する文献を精査する知見はない。しかし、告白書でスターが綴った、非キリスト教化する世界で、頼りにならない教会、金持ちにだけ阿る聖公会の有様、ますますセクト化する教会への批判は今後もスター理解の上で吟味されていくべきものであろう。小説の主人公とはいえ、メサ・ヴェルデの二人の神父の姿を「殉教」とまで描いた布教の姿に心惹かれたスターには、19世紀末のプロテスタント教会の姿は耐え難いものであったのだろう。そして、同じ状況下において、アダムズが選び取った方針、すなわち宣教の道を選ばず、宗教的権威をあくまで排除し、もはや異教との並置しか道はないと寛大、寛容を掲げるこそキリスト者の使命と選び取った姿とともに吟味されるべきことだろう。

アダムズを育て鍛えたハル・ハウスは、多文化、多様性に柔軟に対処し、

受け入れていった場所である。宗教色を排除し、そのことを新しいアメリカ社会の根幹に据えた。多宗教、多文化を取り込み多元であることが、アメリカのキリスト者の使命と目標を据え直した。そして、当時興った最新の社会科学的手法を駆使し、近代化のひずみと向き合い、アメリカの行く末に政策を提案しながら、希望を与えた場所であるとされる。アメリカが誇る研究者が集いアメリカの未来を探り、その提案、その考え方は今日のアメリカの礎となった。自分も創設に加わったその場所に背をむけ、最後にスターが選んだのは厳しく旧来の規律を守る世界であった。女性の人権のためにあれほど力を尽したスターが、その家父長的な権威主義を知ってなお選んだ世界は、19世紀を生きた女性にとって埋められないものがハル・ハウスの世界観、宗教観、そして問題解決の方法にあったということであろう。拡大・変化するハル・ハウスの方針の折々に、真摯な選択を積み重ねていったスターが忘れ去られていった軌跡が浮かびあがるだろう。

修道院で暮らした晩年、スターが描いた水彩画の花々が残る<sup>50)</sup>。製本を飾った小さな花々を思わせる。社会改革を望み、激動期を生きたスターの原点をひっそりと伝えている。

## おわりに

広がる貧富の差は今日、アメリカで「第二次、ギルデッド・エイジ（金びか時代）」と言われている<sup>51)</sup>。異文化、異教への対応も厳しく問われている。100年前に同じ問題に取り組んだハル・ハウスの活動家たちが見直されている。かれらの歩んだ道を振り返る時、ハル・ハウスにせめぎあいの縮図があったことを忘れてはならないだろう。スターが開設に心血を注いだ、パトラー・アート・ギャラリーは、高尚過ぎる芸術展示として影を潜めていった。上から目線の移民蔑視の活動とさえ言われた。対照的に、労働博物館はアダムズが謳った移民理解、さらには国際理解を構築する場として称えられた。しかしアダムズの改革路線の中で退けられたスターの数々の思い、そしてスターが最後に下した決断を振り返ることは、革新主義といわれた改革、その中核を担ったセツルメントの本質をもう一度見直す機会になることだろう。

## 注

- 1) スターには単独の伝記はない。“Introduction: Ellen Gates Starr and Her Journey To-

ward Social Justice and Beauty” in *Ellen Gates Starr: On Art, Labor, and Religion*, Edited by Mary Jo Deegan and Ana-Maria Wahl, New Brunswick and London, Transaction Publishers, 2003, *Urban Experience in Chicago: Hull-House and Its Neighborhoods, 1889-1963*, History Website by the Jane Addams Hull-House Museum and the College of Architecture and the Arts at the University of Illinois at Chicago. 本論では上記資料と以下イリノイ大学図書館、スミス大学所収の資料を使用した。Ellen Gates Starr Papers, Hull House Collection, University of Illinois at Chicago, Chicago, Illinois (以下 UIC). Ellen Gates Starr Papers, Sophia Smith Collection, Smith College, Northampton, Massachusetts (以下 SSC).

- 2) *Suellen Hoy, Ellen Gates Starr: Her Later Years*, Chicago: Chicago History Museum, 2010. Hoy, “The Unknown Life of Ellen Gates Starr,” in *Chicago History: The Magazine of the Chicago History Museum*, Spring 2009, Vol. xxxvi, Number 2, pp. 4-19.
- 3) T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920*, Chicago & London: University of Chicago Press, 1981. Eileen Boris, *Art and Labor: Ruskin, Morris, and the Craftsman Ideal in America*, Philadelphia: Temple University Press, 1986.
- 4) 近年の研究成果は *Jane Addams and the Practice of Democracy*, Edited by Marilyn Fischer, Carol Nackenoff, and Wendy Chmielewski, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2009, *Feminist Interpretation of Jane Addams*, Edited by Maurice Hamington, University Park, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 2010. ソーシャルワークの視点で日本への影響にも言及するのは木原活信, 『J. アダムズの社会福祉実践思想の研究』, 東京: 川島書店, 1998.
- 5) Photograph, EGSP, Box 23, Folder 2, Record 2190, n. d., (SSC).
- 6) 当時の母子像人気については, Kristin Schwain, *Sighs of Grace: Religion and American Art in the Gilded Age*, Ithaca & London: Cornell University Press, 2008. p. 128. 19世紀アメリカにおいて, 聖母子像が敬虔で家庭的な母子像に変化し, 人気を博した過程に言及している。
- 7) Jane Addams, “The Art-Work Done by Hull House, Chicago”, in *100 Years at Hull House*, Edited by Mary Lynn McCree Bryan and Allen F. Davis, Bloomington & Indiana: Indiana University Press, 1969, pp. 39-42. “Arts at Hull-House”, in Jane Addams, *Twenty Years at Hull-House* (1910), Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1990, p. 214.

- 8) Starr, "A Note of Explanation", EGSP, Box 18, n. d. (SSC), "Hull-House Bookbinding" (1900) in *On Art, Labor, and Religion*, pp. 79-81.
- 9) T. J. Cobden-Sanderson, *Industrial Ideals and the Book Beautiful*. n. d. Humersmith Publishing Society, Reprint, Literary Licensing.
- 10) Starr, "Art and Public Schools" (1892) in *On Art, Labor and Religion*. Pp. 39-42.
- 11) Starr, "Report of the Chicago Public Art Society" (1896), in *On Art, Labor and Religion*, pp. 75-78. CPAS の創設は1894年。
- 12) Peggy Glowacki and Julia Hendry, *Hull House: Images of America*, Chicago: Arcadia Publishing, 2004, p. 23.
- 13) Starr, "Art and Democracy" (1895) in *On Art, Labor and Religion*, pp. 59-64. John Ruskin, *The Stones of Venice* (1851-53), Dacapo Press, 1985.
- 14) Elizabeth Lee, "Therapeutic Beauty: Abbott Thayer, Antimodernism and the Fear of Disease," *American Art*, Vol. 18, No 3 (Fall 2004) pp. 32-51.
- 15) Starr, "Art and Labor" (1895) in *On Art, Labor and Religion*. pp. 59-64.
- 16) The Residents of Hull-House, A Social Settlement, *Hull-House Maps and Papers: A Presentation of Nationalities and Wages in a Congested District of Chicago, Together with Comments and Essays on Problems Growing Out of the Social Conditions*, (1895), Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2007. Kathryn Kish Sklar, *Florence Kelley and Nation's Work: The Rise of Women's Political Culture 1830-1900*, New Haven: Yale University Press, 1995.
- 17) Deegan, *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892-1918*, New Brunswick: Transaction Books, 1990, Helen Silverberg, *Gender and American Social Science: The Formative Years*, Princeton: Princeton University Press, 1998.
- 18) Kathryn Kish Sklar, "Hull House Maps and Papers: Social Science as Women's Work in the 1890s", in *Gender and American Social Science*, pp. 127-155. *On Art, Labor and Religion*, P. 13.
- 19) Cecelia Tichi, *Civic Passions: Seven Who Launched Progressive America (and What They Teach Us)*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2009.
- 20) EGSP, Box 18, Folder 7, (SSC), Starr, "Handicraft Bookbinding and a Possible Modification" n. d. "Notes on Bookbinding with Examples" in *Brush and Pencil: An Illustrated Magazine of the Arts of To-Day*, Vol. NO. 4, January 1900, pp. 178-182, EGSP, Box 18, Folder 1, (SSC).

- 21) The Handicraft of Bookbinding”, *Industrial Art Magazine* 3 (March 1915) :102-107, “The Handicraft of Bookbinding”, *Industrial Art Magazine* 4 (Sep. 1916) : 104-107, “Bookbinding”, *Industrial Art Magazine* 4 (November 1916) : 198-200, “Bookbinding”, *Industrial Art Magazine* 5 (March 1916) : 97-113, in *On Art, Labor and Religion*, pp. 89-113.
- 22) Starr, “Bookbinding”, March 1916, in *On Art, Labor and Religion*, pp. 100-101. “The Handicraft of Bookbinding”, Sep. 1916, in *On Art, Labor and Religion*, p. 95. “Book-binding”, March 1916, in *On Art, Labor and Religion*, p. 109. p. 13.
- 23) Starr, “The Handicraft of Bookbinding” (March 1915) in *On Art, Labor and Religion*, p. 89.
- 24) Biographical Data (1916), Ellen Gates Starr Papers, (UIC) スターの製本は1冊100ドル近くの値をつけた。Boris, p. 245, no 41.
- 25) “Settlement House Reformers Critiques” in Helen Lefkowitz Horowitz, *Culture and the City: Cultural Philanthropy in Chicago from 1880-1917*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1976. Mary Ann Stankiewicz, “Art at Hull House, 1889-1901”, *Woman’s Art Journal*, Vol. 10, No. 1 (Spring-Summer, 1989), pp. 35-39.
- 26) Addams, *Twenty Years at Hull-House*, (1910), Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1990, pp. 226-228.
- 27) 「デューイ博士のいう経験の絶え間ない再構築」の教育現場とアダムズ自身が位置づけている。Addams, *Twenty Years at Hull House*, pp. 142-147. Deegan, p. 251. Anne Durst, “The Laboratory School” in *Women Educators in the Progressive Era: The Women behind Dewey’s Laboratory School*, New York: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 97-123. “The Curriculum of the Settlement House,” in Petra Munro Hendry, *Engendering Curriculum History*, New York and London: Routledge, 2011, pp. 162-166. 親子関係改善の成果を移民の立場から語るの、Hilda Satt Polacheck Epstein, Edited by Dena J. Polacheck, *I Came a Stranger: The Story of a Hull-House Girl*, Urbana & Chicago, University of Illinois Press, 1989, 65-66. 手仕事作品の一部は販売された。Nicholas V. Longo, “The Labor Museum” in *Why Community Matters: Connecting Education with Civic Life*, Albany: State University of New York Press, 2007, pp. 63-65 は地域に奉仕する博物館の事例として称えている。
- 28) “First Report of the Labor Museum, Hull House, Chicago, 1902-1902,” Hull House Collection, Folder 586, (UIC).



- 29) Jane Addams, "Labor Museum at Hull House" *Commons*, 47, June 30, 1900, pp. 1-4. " - First Report of the Labor Museum, Hull House, Chicago, 1901-1902," Hull House Collection, Folder 586, (UIC), Jessie Luther, "The Labor Museum at Hull House, in *The Commons*, Number 70, Vol. VII, May 1902, pp. 1-13, Ellen Gates Starr Papers, (UIC), Marion Foster Washburn, "A Labor Museum", *The Craftsman* Vol. VI, Sep 1904, p. 573, Hull House Reference Files, (UIC). フイリピン展示に関しては *Hull House Bulletin*, Vol. VII 1905-1906, No1, pp. 15-16. (UIC).
- 30) *Hull House Bulletin*, Vol. IV 1900, No3, pp. 8-9, *Hull House Bulletin*, Vol. V Semi-Annual 1902, No. 1, pp. 12-13. (UIC). 前掲 "First Report of the Labor Museum at Hull House".
- 31) Addams, "The Settlement as a Factor in the Labor Movement" in *Hull-House Maps and Papers*, pp. 138-149.
- 32) Eleanor Grace Clark, "Ellen Gates Starr and Labor", *Commonweal* (March15, 1940) : 446-447, in *100 Years at Hull-House*, pp. 116-118.
- 33) Davis, "The Settlement and the Labor Movement" in *Spearheads for Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement, 1890-1914*, New York: Oxford University Press, 1967, pp. 103-122. Jennifer L. Bosch, "Ellen Gates Starr: Hull House Labor Activist", in Ronald C. Kent, Sara Markham, David R. Roediger and Herbert Shapiro, *Culture, Gender, Race and U. S. Labor History*, Westport: Greenwood Press 1993, pp. 77-88.
- 34) Starr, "1910 Testimony by Ellen Gates Starr of the Picket Committee"(1910) in *On Art, Labor and Religion*, pp. 117-118.
- 35) Starr, "Efforts to Standardize Chicago Restaurant---The Henrici Strike" (1914), *Survey* 32 (23 May 1914) : 214-15 in *On Art, Labor and Religion*, pp. 119-124. Starr, "1915 Testimony by Ellen Gates Starr on Her Arrest" (1915) in *On Art, Labor and Religion*, p. 127. アリス・ハミルトンは次のようにいとこのアグネスに書き送っている。「クララが、ウエイトレスのストライキのことを伝えてきたの。ミス・スターがピケをはりながら、逮捕されるのを待ち望んでいるかのようだというのが。スト中のスターほど手に負えないものは無いのよ。」 Alice Hamilton to Agnes Hamilton, Baltimore March 1st, 1914, in Barbara Sicherman, *Alice Hamilton: A Life in Letters*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2003, p. 174.
- 36) Starr, "The Chicago Clothing Strike" (1916), *The New Review* 4 (March 1916) : 62-

- 64, in *On Art, Labor and Religion*, pp. 129-133, "Cheap Clothes and Nasty" (1916), *The New Republic* (1 January, 1916): 217-9, in *On Art, Labor and Religion*, pp. 135-138. Harold L. Ickes, George H. Mead, Irwin St. J. Tucker, "Brief History of the Clothing Strike in Chicago", EGSP. Box 18, Folder 12, (SSC), Sidney, Hillman to Starr, 1915, EGSP, - Box 9, Folder 16, (SSC). ヒルマンはスターの体を張ったその行動に感謝し、女性の協力を得て心強いと賛辞を贈っている。Starr, "Why I am A Socialist" (1917) in *On Art, Labor, and Religion*, pp. 145-146. "In Memoriam Caleb Allen Starr by One of His Daughters," (1915), p. 12, Ellen Gates Starr Papers, (UIC).
- 37) Serri Berger, "Bookbinding and the Progressive Vision", *Chicago History: The Magazine of Chicago History Museum*, Fall 2005, Chicago History Museum, pp. 4-31, p. 6.
- 38) Clark, 前掲書, Bosch, 前掲書。あくまでも労使協調を説いたアダムズの著作の一例は Jane Addams, *A Modern Lear* (1912), Chicago: Jane Addams' Hull-House Museum, 1994.
- 39) Starr, "A Bypath into the Great Roadway" (1924), *Catholic World* 19, May 1924: 177-90, Reprinted Chicago: Ralph Fletcher in *On Art, Labor and Religion*, pp. 167-200.
- 40) "Eliza Allen Starr" in *On Art, Labor and Religion*, pp. 159-166, Donald Gorrell, *The Age of Social Responsibility: Social Gospel in the Progressive Era, 1900-1920*, Macon, Ga.: Mercer University Press, 1988. 当時の教会批判を展開したハンティングトンはニューヨークを拠点に独自の活動 (The Order of Holy Cross) を展開した。
- 41) 19世紀アメリカにおけるカトリック教徒への蔑視は多くの資料が語るころであるが、ホイはカトリックへの改宗は売国奴に等しいとされたと説明している。早い段階でのスターの改宗を思いとどまらせた要因の一つにしている。Hoy, p. 71.
- 42) T. J. Jackson Lears, "The Religion of Beauty: Catholic Forms and American Consciousness" in *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920*, Chicago & London: The University of Chicago Press, 1981, pp. 183-215.
- 43) Patrick Allitt, *Catholic Converts: British and American Intellectuals Turn to Rome*, Ithaca and London: Cornell University Press, 1997, p. 128. 模倣、画一化したアメリカの教会建築・内装、流れる音楽に堪えてなお、改宗したいと皮肉をこめてスターは語っている。
- 44) "A Bypath into the Great Roadway", p. 176.
- 45) *Ibid*, pp. 177-178.

- 46) *Ibid*, pp. 179-180. 修道会献身者 ((Oblate) となって1940年に永眠。
- 47) Willa Cather, *Death Comes for the Archbishop* (1927), New York: Vintage Books, 1990.  
神父の一人はサンタフェ最初の大司教, フランス人, ジーン・バプティスト・レイミーをモデルにしたと言われる。
- 48) Hoy, p. 38.
- 49) Cather, p. 270.
- 50) Starr, “Flower studies, 1931-32” EGSP, Oversize Materials (SSC)
- 51) Cecelia Tichi, *Civic Passions*.